

2016年度
修士学位請求論文

滝沢克己と久松真一

国際日本学研究科 国際日本学専攻 文化・思想研究領域

4911146002

鈴木友里花

修士学位請求論文要旨

覚の立場に立つ久松真一と神学者である滝沢克己をてがかりに、宗教における救いについて考えたい。キリスト教徒でありキリスト教神学者でありながら、仏教にも造詣の深い滝沢克己が、両宗教の根源的問題を論ずる『仏教とキリスト教』をとりあげる。この本は、有神論的な宗教と決別し、無神論を主張する久松真一のキリスト教批判に対して、滝沢克己がどのようにキリスト教を考えるかを伝える。滝沢克己と久松真一の考えを参考に本論文において、宗教における救いの場で、神への信仰とはいかなるものか明らかにした。

第Ⅰ章では、滝沢克己と久松真一の思索を紹介する。2人の生涯とその中心思想を検討することで、両者の宗教的に救われる体験が久松真一においては無相の自己を覚すること、滝沢克己においては独自のインマヌエル理解へと結実したことを確認した。

第Ⅱ章では、久松真一と滝沢克己の思想を比較する。キリスト教神学者そしてキリスト者でもありながら仏教に造詣の深い滝沢克己が仏教とキリスト教における根本問題を論ずる『仏教とキリスト教』を中心に検討することによって、滝沢独自のキリスト教理解が、非キリスト教文化圏の人々にもキリスト教の救いの道を開き、また仏教との対話を可能としたということを検討した。

第Ⅲ章では、滝沢克己と伝統的なキリスト教を比較する。滝沢克己のキリスト論の問題を検討し、イエス・キリストを助縁とする信仰についての問題点について述べたい。滝沢は神と人の接触を第一義接触と第二義接触に区別しているが、伝統的なキリスト教理解ではイエス・キリストの誕生によって神と人の接触が始まったとされる。また、イエスが誕生したからこそ人は第一義接触について知ることができるのであってそれ以前のことは語ることはできないということもできる。さらに、イエスがただの助縁であるとするならば、イエスの歴史の意味とは何か。こうした問題に滝沢はどのような返答をしているのか検討した。

まず、滝沢の主張する久松との共通点とは、自覚を問題にしている点にある。仏教もキリスト教も本来の自己に目覚めるという構造があるという。そして、本来の自己は他でなく自分のところにある点である。つまり、滝沢にとって救いの第一の可能根拠はイエス・キリストではなくインマヌエルである。イエスは正しくインマヌエルの事実を目覚めたお手本となる。こうしてキリスト教は開かれた宗教であることができ、また仏教との対話も可能であると滝沢は考えている。

一方で相違点についていうと、滝沢によれば、神と人は一緒にできるものではない。そのため、この私が久松の無相の自己や神や仏となることはできず、無相の自己の自己表現までしかいけない(第二義接触の一形態)と久松を批判する。人間はどこまでいっても相対的であるために、神によって与えられた救いの事実だからこそ救いとなると滝沢は考えている。

こうした滝沢の主張に久松が直接返答することはほとんどなかったのだが、しかし久松は一貫として、救いの根拠が外にあるのでは、絶対安心することができないと述べる。そのため、私が救うものにならなければならないと久松は考える点で、滝沢とは異なっている。

ところで、それは滝沢がイエス・キリストを従来のキリスト教に比べて絶対視していない点にある。それに伴う問題点を明らかにすることで、従来のキリスト教と滝沢克己の差異を明らかにした。

バルトにおいては、時間的な出来事も神によって決定されており、人間をこえた神の在り方を徹底してバルトはよく考えていると評価する。

しかし滝沢は人間の自覚を問題としているのでその観点からバルトとは違った見方の理論を展開する。滝沢は、バルトと同じように第一義接触を強調する。しかし滝沢の場合は自覚という枠組みの中で問題としているためにバルトに共感しながら、イエスの位置づけには違った形で答えることとなった。

結論として、滝沢克己のキリスト教における信仰の独自性は、自己の足下にある救いの事実（インマヌエル）を正しく自覚することを強調する点にある。滝沢は、イエスを対象的に信じるのではなく、イエスを、彼自身のもとにもあった救いの事実を正しく自覚し表現した一つのお手本とし、イエスと躍動をともにするという点を重視している。イエスを救いの絶対条件としない、そのような滝沢独自のキリスト教理解は、仏教とキリスト教の対話の出発点として重要である。

とはいえ、仏教の立場に立つ久松からは、救うものが他者である限り人は本当には救われないという見方、キリスト教神学者のバルトからは、時間の中で起こることも、神に出会うことも神の決定であるという見方が、滝沢に対する批判として示されている。しかし、それらを考える立脚点として、やはり自覚に注目する滝沢の宗教理解は大きな意義をもっている。